

## 田尻龍正著 『芭蕉論集』

白石, 悌三  
福岡大学教授

<https://doi.org/10.15017/11955>

---

出版情報 : 語文研究. 65, pp.68-68, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :



## 《紹介》

### 田尻龍正著『芭蕉論集』

白石 梯 三

本稿の筆を執ろうとしていた矢先に、著者から停年退官の御挨拶状をいただいた。本書の後記には、「ふりかえってみると在学中、学徒出陣で外地に出、復員、帰国してみると、広島の家、書物はもちろん両親はじめ一切を失っていた私は終戦直後の混乱の中でやり直しを余儀なくされ、研究も生活も簡素というか粗末というか不如意なことばかりで、春の風に吹かれる木の葉のように学窓を出た」とある。その世代の方々が今、ちょうど停年を迎えて第一線をお引きになるのかと、ある感慨をもよおした。ここに研究生生活の一区切りとしてまとめられた論文集には、しあわせな時代に研究生生活をスタートした後輩にはうかがい知れない思いがこもっているにちがいない。著者が芭蕉についての文芸論的考察、「わけても芭蕉という人の、創作、執筆、表現のその時々の中の心の中に入って行こうとする、所謂へ生きている時間」に思いをめぐらす考察」を志向されたのも、ひそかな自己救済の意義があったであろうし、また不便な環境で方法としても文芸論に就かざるをえない事情もあったかと拝察する。結果的に、成果の測定の最もむづかしい「正道」を歩まれたことになる。

全十三章十一篇の論文のうち、第一章の五篇は、〈さび・しほり・細み〉〈不易流行〉〈風雅の誠〉〈かるみ〉等、芭蕉における理念的なものの形成過程を主に論じたもの。第三章の四篇は、その成果を『お

くのほそ道』の表現において検証したもので、中の一篇に「不易流行の形成過程の考察・続篇」とサブタイトルを付すように、第一章と相互補完の関係にある。就中、解釈上のゆれを捉えて自身の読みを提出された部分が興味深く、中には見解を異にするものもあるが、月山頂における「日没して月頭る」の解釈などは卓見であろう。

第二章の二篇は、以上とは趣きを異にして、本書にとっては付録的性質のものかも知れないが、見すごしにできない意義をもつ。讚州興昌寺の一夜庵筆海帖に七十数句を占める日向佐土原の連衆の素姓を調査し、献句のいきさつを考証したもので、「談林中の惟中一派が臨済禅の宗網にそって俳人の側から俳系組織をひろげていた形跡」をそこにかがっている。また、当時、佐土原に流されていた法華僧日講の日記「説黙日課」に惟中との交渉を示す記事を見出して、右の考証を補強するとともに、「寛文から元祿にかけての約三千年間の僻陬小藩における文事の全貌」を日記から紹介し、そこに「同時期の文壇全体の縮図」を見、その「文事の普及渾融的傾向の俳諧への反映」として、談林から蕉風への過渡期の俳風を捉えようとする意図を示しておられる。

第二章の紹介に比重がかかり、肝心の芭蕉論の紹介が簡略にすぎたことを申しわけなく思うが、制限枚数の中で一々の論旨に及ぶことができなかつた。蕉風の理念に関心をいだく向きは、直接に原著に就かれたい。文は人なりというが、律義で謙虚なお人柄のにじみ出た著作である。

(昭和六十二年十月、桜楓社、菊版、八〇〇円)